

近代経済発展期における合理的神秘主義思想：

大石凝真素美の日本言霊学を事例に

山崎 好裕

福岡大学経済学部

WP-2020-013



福岡大学先端経済研究センター

近代経済発展期における合理的神秘主義思想：

大石凝真素美の日本言霊学を事例に

山崎 好裕

概要

大石凝真素美は、江戸時代から続く国学の言霊研究を踏まえ、明治時代という近代経済の発展期に日本言霊学に関する言辞を展開した。それは基本的には神秘主義思想に属するものであるが、水茎文字という、日本語を子音と母音で構成する人工文字を作ったことや、各音の表す言霊の内容を、多面体の幾何学的な構成で表現して見せたことなど、近代科学のスタイルを借りた合理性を覗くこともできる。マックス・ヴェーバーは、近代合理主義が社会に浸透することで世界の脱呪術化が起きるとしたが、19世紀ヨーロッパでも見られたように、神秘主義思想自体のある種の合理化が進むという側面がある。大石凝の言霊学が日本における近代音韻学に繋がる芽はなかったと言ってよいが、そうした方向での研究は上代特殊仮名遣いの、江戸国学以来の研究蓄積の上に徐々に進展していくことになる。

JEL 分類番号 B190, N950.

キーワード：大石凝真素美、日本言霊学、水茎文字、50音図、六角切子。

Rational Mysticism in the Developing Period of Modern Economy: A Case Study on Masumi Ohishikori's Psychics of Words

Yoshihiro Yamazaki

Abstract

Masumi Ohishikori developed psychics of words on the basis of early researches in Japanese literatures in the developing period of modern economy in Meiji era. The study belongs to mysticism basically. It, however, has rational aspects of modern science style in that he made alphabet-type letters consisted from consonants and vowels and in that he expressed the meaning of sounds using a geometrical polyhedron. Max Weber thought that modern science would rationalize the world. We, however, shouldn't miss the tendency of rationalization of mysticism itself. There was no possibility that Ohishikori's psychics of words developed into modern phonology. Instead of that, scholars was developing researches on special 'kana' orthography in ancient Japan on the basis of Edo era's researches in those days.

JEL classifications: B190, N950.

Keywords: Masumi Ohishikori, psychics of words, Mizukuki letters, Japanese syllabary, hexagon-cut glass.

はじめに

神秘主義思想やオカルティズムは近代経済が発展しても無くならない。しかし、その内容や表現において、合理化が進んでいくことは、洋の東西を問わずよく見られることである。たとえば、19世紀ヨーロッパでは、心霊学の科学的な研究が進んだ。マックス・ヴェーバーは、近代経済がこうした宗教的な要素を蒸発させていき、合理性の骨組みだけが社会に残される過程を脱呪術化と呼んで定式化していたが、どうやら事態はそれほど単純ではなさそうである。

日本においても、江戸期を通じて西洋近代科学の断片的な導入が進み、多くの分野で独自の発展も見られた。しかし、開国を経て明治時代になると、西洋文明の全面的な導入が進むとともに全面的な近代科学の全盛時代を迎える。人々のものの考え方も急激に合理化していったことは言うまでもない。

しかし、幕末開国に見られた西洋化の潮流の反面として、それらを取り入れるかたちで、一種の国粹主義的な思想も勃興したことも同時に指摘しなければならない。典型的なのは後期国学であり、なかでも、平田篤胤の学派の展開であった。篤胤自身が、神話を再構成するとともに、顕界と幽界という二分法を提示し、死後について魂の救いの問題を前面に押し出したのである。こうした傾向は、神秘主義的な傾き、あるいは、宗教的な雰囲気を伴わざるをえなかった。

また、篤胤の学派とは別なところから、言霊学の流れが発生してくる。福岡柳川藩の藩士であった富士谷御杖は、国学者として言霊論を中心に議論を展開した。御杖はその歌論のなかで、歌というものは心のうちから湧き出てくる思いをそのまま詠むのではなく、それを世の中との葛藤のなかで言葉を転換しながら詠んでいくものなのだ、という倒語論を展開するなど、独自の境地を示した。

現在の千葉県に生まれた山口志道もまた、^{かだのあずまき}荷田春満の流れを汲む^{かだののりゆき}荷田訓之に師事し、言霊論を発展させた。その言霊論は日本語 50 音にそれぞれの意味を見出そうとするものであった。中村孝道は現在の山口県の人であったが、日本語 75 音の神秘的な解釈を一層推し進め、とりわけス音を中心的な音素として重視した。本稿で取り上げる大石凝真素美の日本言霊学は、日本語を 75 音としていること、ス音を重視することなど、孝道からの影響が色濃く見られる。

薩摩藩士の家から出た本田親篤^{ちかあつ}は明治に入り、鎮魂帰神法を中心とする霊学を確立するのに力があつた。彼は、佐賀出身の有力政治家である副島種臣にも影響を与え、副島の自宅で本田が神を下ろすなどの儀式をしている。こうした明治の霊学の展開のなかで、天保 3 (1832) 年 11 月、現在の滋賀県甲賀郡にあった油日村に、後に大石凝真素美となる望月大輔は生まれた。真言教学と天台教学を学んだ後、明治元 (1868) 年、美濃国不破郡宮代村の修験者・山本秀道に弟子入りし、共に俵佐村の勝神社で鎮魂帰神法を行っていた。明治 6 (1873) 年、望月は^{ちかあつ}大石凝真素美に改名し、明治 11 (1878) 年には日本金木学と日本言霊

学を集大成したと称していた。本稿で取り扱う大石凝の著作『大日本言霊』は、死去まで10年の時期である明治36（1903）年に脱稿したものであり、大正13（1924）年に出版された。

1. 大石凝の言霊思想

大石凝の著作を読んでいく上で、注意しなければならない点がある。それは、大石凝が文章のなかで、自ら搜索した水茎文字という独自の文字を使っていることである。水茎文字は図1のようなものであるが、これをそのまま引用することは不可能であるので、大石凝がカタカタのルビをいちいち振っていることを生かして、引用ではカタカナで表記し、脚注によってそれが本来水茎文字であることを示したい。もう一つが、大石凝が存在しない独自の漢字を自作していることである。これについても、水茎文字の扱いと同じように、引用する際はカタカナで表示した上で、脚注で説明を加えたい。

図1 水茎文字

パ	バ	ダ	ザ	ガ	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	イ
P	B	D	Z	G	W	R	Y	M	H	N	T	S	K	A	
士	丰	止	△	卍	△	卍	卍	卍	△	上	下	△	卍		
主	丰	止	△	卍	△	卍	卍	卍	△	上	下	△	卍	-	a
主	丰	止	△	卍	△	卍	卍	卍	△	上	下	△	卍	=	o
士△	丰△	止△	△△	卍△	△△	卍△	卍△	卍△	△△	上△	下△	△△	卍△	△	u
士	丰	止	△	卍	△	卍	卍	卍	△	上	下	△	卍		e
士	丰	止	△	卍	△	卍	卍	卍	△	上	下	△	卍		i

冒頭において大石凝は、宇宙の根源としてのス音について語っている。¹

夫れ此の世の極元をス^{ヨモト}といふ。物が極乎恒々至大広々而自然と十八稜團^{スミキリヒロギキリテラノゾ トマリアカドツブ}の形を備をり
タダヨヒテフカマリアリツツツララギ
 湛々 玄々 黙々 恒々 たりつ。

ここで大石凝は、世界の根源であるスのかたちが18角の立体であることを述べており、

¹ 大石凝（1924）、1ページ。
² 素を左に氣を右に置いた創作漢字。

幾何学に基づいて合理的に説明しようという指向性を感じられるのである。頂点が 18 個ある立体であるが、後に説明を加える六角切子と同じものであると考えられる。切子は周知のようにガラスをカットした工芸品であるが、宇宙がそうした透明な立方体であるという理解は、ヨハネス・ケプラーが太陽系 6 惑星の軌道について、1596 年の『宇宙の神秘』で示した正多面体模型を彷彿とさせる。ケプラーは太陽に最も近い水星の公転半径を半径に持つ球を考え、これに外接する正八面体を想定する。そして、この正八面体が内接する球の表面に金星の軌道があると考えた。さらに、金星軌道の急に外接する正十二面体を考え、これに外接する球の表面に地球の公転軌道があるとする。地球の急に外接する正二十面体に、さらに外接する球の表面上にあるのは、火星の公転軌道である。次いで、火星の公転軌道がその表面に存在する球に外接する正四面体を考え、これに外接する球の表面に木星の軌道があるとした。最後は、木星の球に外接する正六面体であり、それに外接する球の表面に土星の公転軌道がある、ということになる。ケプラーの考えでは、当時の知識として太陽系の惑星が 5 個だけであったことから、この個数は正多面体が 6 種類しかないことに対応している。

さて、大石凝によれば、このスの頂点あるいは角の根元には本来反発力のような「^{タカノチカラ}対照力」³というものが備わっており、そうした反発力によって自動的に宇宙へと展開していく。「^{タカマガハラ}至大天球」⁴にはこの力で球体が出現し、地球、月、星々へと発展する。地球の上には草木や獣、そして、人類が出現する。日本神話に由来する古語のようなものが使われているが、描かれているのは近代科学が明らかにした宇宙創成と生命誕生の、ごく素朴な記述であり、言霊思想に科学的根拠を与えようとする努力と見てよい。

この後、いよいよ言霊が声として登場してくる。⁵

故れ此の身は極微点連珠絲の束の株に、^{ナツキスネ}眞精液が^{ムスビナ}結晶りたる體なるが故に此身は心の塊也。玉の緒の塊也。^{コノ}神靈元子の塊也。此の^{アマノハラ}天中の眞を全く結び暎へ居るが故に、^{オノ}天親元の氣と身子の氣と、相ひ搏つ時は必ず聲を發しそ。其の心を頭はし出し示す也。是を以て知る聲は^{ソノママ}即心也。心は即ち聲也。聲と心と實に^{ヒトツ}一如也。其の心は玉の緒の品筋が、すがの八つ耳にさしかふ色を示すふるが故に、心の元が玉の緒也。玉の緒の全體が^{ミタマ}靈魂球也。靈魂球は即ち^{タカマガハラ}至大天球也。至大天球を造宮為而居る物は、極乎恒々^{イトナミ}至大浩々而在りける^{コノ}神靈元子也。此の元末を總て^{ソノ}ソ⁶といふ也。

「神靈元子」と書かれる神的素粒子が「声の子」と読まれ、声と心が織り成すこの世の運動の全てがガスであると明かされている。神はロゴスであったという、聖書を思わせる記

³ 同上、2 ページ。

⁴ 同上。

⁵ 同上、6-7 ページ。

⁶ 素を左に氣を右に置いた創作漢字。

述である。大石凝によると、宇宙の根源であり、生命の源である声の真理は、日本語の言霊を通じて明らかにされる。⁷

其事柄の神靈^{ウズシキマコト}眞を顕はし示し教ふる者は、是此大和^{オホヤマト}の国の言霊也。是を以て此の大皇国^{オホミクニ}を言霊の幸はふ国といひ、言霊の助くる國といひ、言霊の當れる國といひ、言霊の天照る國といひ、活居る國といふ也。因りて人皆嘘を忌み、悪み嫌ひ、信義を守りて、皇^{スメラギ}を尊み、常とはに、誠の忠孝を賜りて助けられ居るなりける。

こうして言霊の国としての日本を褒め称えた上で、大石凝は自身の言霊思想について神道的なまとめを行っている。⁸

極典古事記を天地火水の天造神算木^{アマツカナギ}に掛け行ひて、千坐の置坐に置き足らはし盡しつ、ミチ^ト9 涸の玉をつかひ奉る事、高良玉垂^{コラタマリ}の神¹⁰の如くに至るべし。是に於て天造法言^{ココ}の天真地眞法言^{アマツノリト}を宣り盡す時は、大祓^{オホハラヒ}の辭^{コトバ}の眞は現はれて、天津神、國津神は其道々より神つどいにつどい来り玉ひて、天造眞の事柄を明に顕し示し玉ふ也。

ここで大石凝は、祝詞の慣用句を散りばめながら、神典としての古事記を読み、大石凝が大成したとされる占法である天津金木を使えば、真理が明らかになり、また、正確な予言もできることを述べている。

2. 大石凝の 75 音図

大石凝は、彼の 75 音図を「真素美の鏡」と呼び、日本語の音韻体系を最も体系的に示したものと考えていた。鏡の呼び方は、全てを映し出すというところから来ているものであろう。そもそも、大石凝という姓自体、日本神話のなかで鏡を鑄造する神として登場する石凝姥^{いしこりどめのみこと}命に因んで付けていることは間違いない。もちろん、真素美は鏡が曇りなく映っているという意味の真澄である。

図 2 の 75 音図を見ると、幽界と顕界とに母音を対応させたり、天地火水になぞらえたりなどの神秘化が見られるものの、歯・舌・口・唇・喉といういわゆる五音が踏まえられている。この五音こそ、日本古来の伝統的な音韻学を踏まえたものに他ならない。

7

8 同上、12-13 ページ。

9 さんずいへんで、けいがまえの上に業の字の上の部分載せた字のなかに、水を書いた創作漢字。

10 福岡県久留米市御井町にある高良大社の祭神である。久留米市大善寺町にある大善寺垂玉宮に対して、このように呼ばれる。

日本における音韻学研究は、空海が密教とともに、インド声明学の影響を受けた中国韻学をもたらしたことに始まる。その研究はあくまでも密教教学の一環として行われ、悉曇学と呼ばれていた。平安時代に悉曇学を集大成したのは、天台学僧の安然である。そして、その研究は次第に中国の影響から離脱する傾向を見せ、中世における日本独自の展開を遂げていくことになる。

そうした傾向の転回軸をなすのが、加賀温泉寺の明覚であった。中国韻学では子音と母音との区別をするために、それぞれを別の漢字の発音を使って表わす反切^{はんせつ}という方法が開発されていた。明覚は新たに、この反切を音図で表現することを思い付いた。こうして、我々にも馴染みのある 50 音図が成立したのである。

図 2 真素美の鏡

鏡の美素真						
		顯外	天邊	幽内		
天 之 座	さ	け	く	こ	か	齒 之 音
	ざ	げ	ぐ	ご	が	
火 之 座	ち	て	つ	と	た	舌 之 音
	ち	れ	る	ろ	ら	
結 之 座	に	ね	ぬ	の	な	口 之 音
	ひ	へ	ふ	ほ	は	
水 之 座	い	せ	す	そ	さ	唇 之 音
	い	ぜ	ず	そ	ざ	
地 之 座	び	べ	ぶ	ぼ	む	喉 之 音
	び	べ	ぶ	ぼ	む	
	い	え	や	よ	や	
	る	に	ら	を	わ	
	い	え	わ	お	あ	
	齒	舌	口	唇	喉	

明覚は母音を韻音と呼んで音図の横軸に置き、子音を紐音と呼んで音図の横軸に置いた。真素美の鏡と同じである。明覚の独自性は、おそらく、悉曇学や中国韻学の知識とは独立に、自身が日本語を虚心に観察した成果を反映していると考えられる。

平安時代から鎌倉時代への日本音韻学の変化は、奈良興福寺の兼朝や高野山東禪院の心

蓮の研究に代表される。明覚の音図を批判的に見ていた兼朝の業績には、古代から中世への日本語の発音自体の変化が関わっていると考えられる。心蓮ら東禅院流は、真素美の鏡に見られる五音分類の嚙矢を示している。彼らは、アイウエヲを通音、カキクケコを牙声、サシスセソを歯声、タチツテトとラリルレロを舌声、ナニヌネノを喉声、ハヒフヘホとマミムメモを唇声、ワキウエヲとヤイユエヨを遍口声と称した。

そうした中世の日本音韻学に、中国から『韻鏡』が輸入されたことによる変化が生じた。これは、縦軸に同一調音、横軸に同一母音を並べて、その升目に漢字を配置した 43 枚からなる音図であり、唐末から五代ごろに成立したと考えられている。これを、日本では真言学僧である明了房信範が紹介した。この『韻鏡』を研究する韻鏡学は、姓名判断の流行もあって、室町時代にかけて大いに普及した。

近世になる世俗化した音韻学が民衆にも普及して、五音の歌などが人口に膾炙することにもなった。江戸時代の『韻鏡』注釈書では、よく五音の歌が登場する。

アワヤ喉 サタラナ舌ニ カ牙サ歯音 ハマノニツハ 唇ノ軽重

五音の歌ではサ行が 2 回出現している。これについては、「サタラナ」に出てくるサが濁音のザであると理解して解決するのが普通である。マ行やパ行、バ行が唇音であることに疑問がないだろうが、ハ行はどうであろうか。これは江戸時代までのハ行は、ファフィフフェフォと発音されていた事実から理解される。

真素美の鏡では、明治時代の、ハ行をハヒフヘホで発音するようになった事実を反映して、口之音というジャンルに分類されている。清音と濁音で分類が異なっていたサ行とザ行もこの口之音になっている。また、本来喉の奥で発音する牙音であるが、喉の入口で発音する喉音と紛らわしいからか、牙と歯が漢字の意味で混同されたためか、真素美の鏡からは消えてしまっている。結果、カ行とガ行が歯之音に移されるとともに、濁音のダ行が清音のタ行とは別に扱われて、ここに入っている。

3. 大石凝の言霊表現

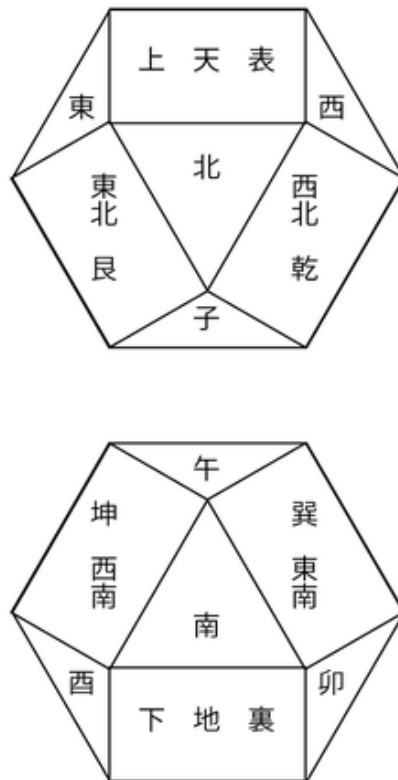
大石凝は、自らの考える言霊の内容を六角切子と呼ばれる、図 3 のような升目のなかに記述している。見てわかるように、六角切子は元々三角形 8 面と四角形 6 面からなる立体である。これを真上と真下から見た平面図が六角形をしていることから、六角切子という名称が付けられた。

第 1 章で見たように、宇宙の根源であるスはこの六角切子の立体形をしていると大石凝は述べていた。六角切子は十八稜団とも呼ばれるのだが、見てわかるように二つの平面図で周囲の 6 角と真ん中の三角形の 3 角を加えると片面 9 角になり、それが二つで 18 角を数

えるためであろう。

図 3 にあるように、上の平面図の頂上に来る四角形が最も重要であり、そこに何の言霊であるかの説明が書かれる。そして、順次追加的な説明が三角形と四角形に書き込まれていくのである。大石凝は 75 音すべてについてこの六角切子を作成しているが、本論文では最初のア音について詳細を見て、六角切子の構成の法則性を類推していきたい。

図 3 六角切子



大石凝真素美「天地茁々貫きの極典」p65
の六角切り子の図を清書したもの

ア音については、天の四角形に「^{アラワレキズルコトダマ} 顕 出 言 靈 御中主也 地球也 世の中心也 大国主也 昼也」と書かれている。次に左右の三角形、真ん中の三角形の順に「大本初頭也」、「圓象入眼也」、「近く見る也 顕之形也」と続く。左右の四角形と真ん中の三角形は「名之塊也」、「光線の力を顕也 眼に留る也」、「大母公也 普而仁慈也」である。

次いで、下の六角形に移る。真ん中上下の三角形と左右の四角形には「ス¹¹之本質也 心之塊也」、「幽之形也 遠く達也」、「其一方面を見る也 低く居る也」、「全躰成就現在也」

¹¹ 素を左に氣を右に置いた創作漢字。

とある。最後に、地の四角形と左右の三角形は「隠れ入る義 悉皆帰之也 夜也 一切含藏也」、「陽熱備はる也」、「勢力固有也 麓也」である。

この確認からわかるのは、天の四角形と地の四角形が対応しており、それぞれ表面の意味と反対の隠された意味を表しているように見えるということである。また、大石凝は、ここで見たような順番で連想を進めているのではないか、という風にも思われる。

そこで、ランダムにヨ音を選んで、そのことを確認してみよう。天の四角形には「寄り結ぶ言靈 ヤオ¹²之結也 天之下也 世之中也 必四間に成る也 四ツに組む也 四ツ也」と書かれている。次に左右の三角形、真ん中の三角形の順に「必定約存也」、「東西南北顕はるる也」、「半也 呼出す形也」と続く。左右の四角形と真ん中の三角形は「天地火水纏る形也 能く指令する也」、「(善美) 也 能く張り合ふ也 矢之道、備る也 祖先億兆、子孫億兆、却々却を現在、明に、保ち居る也」、「^{カマ}窰り合ふ也 億兆之現在所也」である。

次いで、下の六角形に移る。真ん中上下の三角形と左右の四角形には「漂ふ形也」、「オヲ¹³之棚引也」、「ヲオ¹⁴の二ツ既に起り備はる時は 二ツ二ツが四之方面必ず備り在る也」、「螺旋備ふる也 ^{タテヨコ}経緯に挿入る也 驚き呼ぶ聲也 ヨ… ヨ…」とある。最後に、地の四角形と左右の三角形は「離れ散る義 重り下る也 分れ散る也 ^{ヨシ}縦也 ^{ヨスル}廢也」、「生而後に知る所也」、「一極輪也 是をヨといふ也」である。

天の四角形と地の四角形が、ここでも全く逆のイメージを伝えているのがわかる。ア音では現われると隠れるの対比であったが、ヤ音では結ぶと離れるの対比になっている。物事には全く逆の両側面が備わっているということなのであろう。結果、上方の六角形と下方の六角形も全体として意味の対比がされているように感じられる。

おわりに

大石凝の言霊学は、伝統的な日本の音韻学の伝統を踏まえながらも、明治時代の近代合理主義の発想を神道的神秘主義と結び付けており、本論文で言う合理的神秘主義の典型例をなすものである。その合理性は、幾何学的多面体のイメージで解析的に言霊を記述する方法などに見て取ることが可能である。

しかし、それ自体として近代的な意味での日本音韻学へと発展していく道筋は最初から閉ざされていた感も否むことができない。そうした方向性の萌芽は、実際には古くから存在していた。国学における仮名遣い研究である。国学の祖とされる契沖は歴史的仮名遣い

¹² 水茎文字。

¹³ 水茎文字。ただし、ヲは異体字であろうか、○の左に2本の横棒があり、右に1本の横棒のある文字が使われている。

¹⁴ 水茎文字。ただし、ヲは異体字であろうか、○の左に2本の横棒があり、右に1本の横棒のある文字が使われている。

を発見し、元禄 8 (1695) 年、『和字正濫抄』を公刊した。本居宣長は『古事記伝』総論の「仮名の事」において、契沖の指摘した仮名遣いの他に、後に上代特殊仮名遣いの名で呼ばれることになる仮名遣いの違いがあることを指摘した。上代特殊仮名遣いの名称は、大正時代の橋本進吉によるものだが、万葉仮名の使い方に、同音であっても甲類と乙類の厳然とした区別があることを指摘したのである。宣長の示唆は、弟子の石塚龍麿によって研究が進められ、仮名遣いを体系的に分類した『仮名遣奥山路』が寛政 10 (1798) 年に出版された。そして、橋本進吉が大正 6 (1917 年)、『帝国文学』誌に掲載した論文「国語仮名遣研究史の一発見—石塚龍麿の仮名遣奥山路—」こそ、龍麿の業績を 1 世紀ぶりに再発見するものであった。

上代特殊仮名遣いは、奈良時代までの日本人が 8 母音¹⁵を使い分けていたことの結果であることが、現在は知られている。すなわち、アイウエオのうち、イ音、エ音、オ音に甲類と乙類の 2 種類があった。乙類は元々二重母音であったものが、奈良時代以降に一音化してしまったものである。

月のキ音は乙類である。上代には月はツキではなくツクであった。このことは神名の月読^{つぐよみ}から推し量ることができる。このク音にイ音が後ろから加わるということが起こった。こうして上代には、月をツクィと発音するようになったと考えられる。このクィが乙類の万葉仮名で表記された。同じ現象は、茎立^{くくたち}にも起こっている。現在クキと発音される茎であるが、上代はククィと発音されていたことであろう。

乙類のオ音であるが、こちらは上代においてウォと発音されたはずである。大国主神の別称に大乙貴神^{おおなむち}がある。これを『出雲国風土記』では大穴持神と表わす。元々神名のムチは尊いという意味の尊称であるが、『出雲国風土記』の表記から、古代には持ちもムチと読んだことが窺える。これを現在モチと読むのは、ム音の後ろからオ音加わる変化が生じたためであろう。であるから、上代は持ちをムオチと読んでいたはずである。山門のトは甲類であるが、大和のトは乙類であるから、上代にはヤマトオと発声していたに違いない。

オ音はこれらとは異なり、甲類も乙類も二重母音から生成された¹⁶。「花咲けり」のケのエ音を考えてみよう。語源的に「けり」という助動詞は、咲いているの意味の「咲きあり」から生成された。イ音の後ろからア音が付くことで、ia が e となったわけである。こちらが甲類のエ音である。これに対し、嘆きのゲにあるエ音は成立が全く異なる。嘆きは、ため息を意味する長息が語源だが、こちらの場合、長のガ音に後ろから息のイ音が付き、ai が e に変じたものである。こちらの方が乙類のエ音である。上代において仮名遣いに区別があるということは、「咲けり」はサキアリ、嘆きはナガイキのような発音をしていたためだろう。

¹⁵ ハングルで表記される現代韓国語には、基礎母音として 6 音が存在する。ア音が 2 種類、イ音、ウ音が 2 種類、オ音である。

¹⁶ これは現代韓国語とよく似ていて、ハングルでエ音はア音+イ音で表記する。ア音に 2 種類あるため、エ音も韓国語では 2 種類存在する。

これらの二重母音の母音は平安時代までには完全に 1 音化していたため、上代特殊仮名遣いに対応する仮名は作られなかった。しかし、ワ行に特殊仮名遣いが残っている。それは、かなり後までワ行を **wa wi wu we wo** と発音していた証である。これがキやエという仮名で残った。ウ音と **wu** は實際上区別がないため、特殊な仮名は作られなかった。ヤ行も本来は **ya yi yu ye yo** であるが、**yi** はイ音と、**ye** はエ音と区別がないため、特別な仮名を持たないのである。

引用文献

大石凝真素美『大日本言霊』国華教育社、1924 年。